

楼門風覆い

テーマ：和庭に水を流す施設を作ると、水道設備や電気設備などの近代的なものが見えないように考えなければなりません。これらを隠すには庭のテーマに即したものを求められます。

今回は電気の中継盤を覆うための楼門模型の制作です。

【楼門模型草案】

電気中継盤を設置する位置は和庭の主景となる滝組の下なので山門を作ることにしました。また、中継盤を内包するため、ある程度のボリュームのある楼門形式で草案を練りました。

参考にする楼門は茶人でもあった片桐石州が建立した慈光院の茨木門(奈良県)です。茨木門は摂津茨木の城の櫓門を移築し、茅葺(かやぶき)に葺き替えたものです。



慈光院 茨木門

まず、中に入れる中継盤を探さなければなりませんが、電気機材として売られているものは寸法やトビウの開き方が案に収まりません。そこで郵便受けとしてホームセンターなどで売られているステンレスの箱を利用しました。

中に入る中継盤の大きさが決まったので、おおまかな縮尺を考え、写真から図面化します。

構造は後の使い勝手を考え、大屋根、二階壁部、一階屋根部、一階壁部、と完成後も4つのパーツに分解できるように計画しました。

門は一階が素通しか一重の扉がついているのが普通ですが、ここでは中に中継盤が納まるため奥側が閉塞され、手前側は中継盤の扉を開けるため前壁部が開く構造とします。



中継盤に使用の郵便受け

【材料の準備】

焼き杉仕上げが茨木門のイメージに合うようなので、材料は出来るだけ杉材を集めました。板の材についてはホームセンターを探せば相応の材がありますが、柱や格子に使用する細かい材はあまり見あたりません。

昔は町の模型屋に売っていたものですが、町の模型屋もめっきり少なくなりました。最近は百元ショップによく置いています。材質は選べませんが寸法的には結構な種類を置いています。

【加工】

ノコでの切断と磨きが主になります。計画していた寸法の材が手に入らないときは、板材などをテーブルソーで縦引きして所定寸法の材に加工します。切断は細工が細かいので、刃の細かいノコを用い、細かい部分は添え木で押さえながら切断するとよいでしょう。板材が粗材(あらざい)の場合でも、加工数量が少ないのと材が小さいので、プレーナーがけよりも電動サンダーかサンドペーパーによる手磨きが安全です。またバーナーで焼くので、そこそこの仕上げでよいでしょう。

屋根材の加工寸法は正面図・側面図を正確に描いた図面を作成し、各面図からスケールで斜め寸法や角度を測って出すのが一番わかり易いでしょう。切断面は取り敢えず直角にしておいて、組み立て時にカンナで角度を合わせる方法を取りました。(電動丸ノコに角度を設定して切断しても良いのですが、慣れないと難しいです。)

【壁・屋根の組み立て】

下左写真は二階壁部の組み立てです。外部から見えるところには釘を使わず、接着剤で固定します。接着剤が固まるまではハタガネなどを用いて、部材間が蜜に接合されるように押さえておきます。

下右写真は一階部分の柱と壁を基礎材の上に組み立てた状態です。内側面をバーナー焼きで仕上げる場合は、組み立て前に部材をバーナーで焼いておかないと焼き斑が出来やすくなります。



二階部分の組み立て



一階壁の組み立て

屋根の組み立ては部材の端部を斜めに加工しなければならず、カンナで削りながら合わせます。接合はハタガネなどが使いづらい形状なので、一階屋根の組み立て写真のように作業台の上に、細い桟木などで枠を作り、軒先部分の広がりを防ぎながら上から押さえるのが良いでしょう。

なお、屋根材も接着剤で固定しますが、上に茅葺の装飾を貼り付けますので、真鍮釘などで仮固定して釘頭が見えても差し支えありません。



大屋根の組み立て

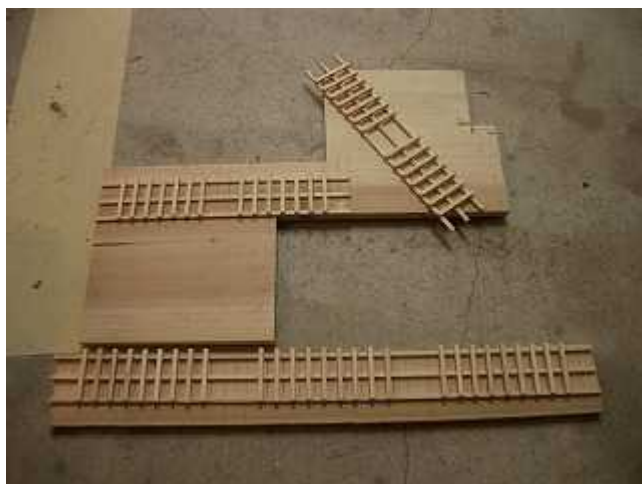


一階屋根の組み立て

【各部の装飾】

二階の壁部や一階の角部以外に柱がないので、薄い工作用の材を貼り付け柱風にします。格子の部分も極細の材を格子状に組み接着材で固定して作ります。屋根の茅葺(かやぶき)は竹ひごを並べて貼り付けます。棟部分は杉皮や細竹などを使って装飾します。

格子の制作は写真のように、組み立てる格子の形を板の上に赤鉛筆で描き、長い横木を仮止めし、その上に短く切断した立子を印に合わせて接着剤で貼り付けて行きます。1箇所ずつの格子を作ると工作しにくいので、ある程度連なったものを作り、後で壁幅に合わせて切断します。部材が細かくバーナー焼きは難しいので、他の細かい部材とともにオイルステンで着色します。なお、着色部に接着剤がはみ出ていると色が付きにくいので、はみ出た接着剤は小刀で削り落としておきます。



二階の格子組み立て



オイルステン塗布

加工を終わった部材は接着剤で本体に貼り付けますが、オイルステンが付いていると接着不良になる可能性もあるので、接着面をサンドペーパーでこすり、オイルステンの膜を落としてから接着します。

屋外へ設置するので、風などで屋根が飛ばないように外れ易いパーツは取り外しできるような金具で固定します。下左写真の二階壁上部中ほどに金具が見えています。右は金具で留めた状態です。



二階の壁部まで組み立て



大屋根まで組み立て

屋根の茅葺に使う竹ひごは竹簾(たけすだれ)をばらして使います。屋根の斜長に合わせて竹ひごを切り、1本毎接着剤で貼り付けます。根気のいる作業です。貼り付け後、オイルステンで着色および防腐処理をします。

棟部分の杉皮の貼り付けも市販の杉皮をそのまま使うと厚すぎるので、ナイフでこそいで厚さをそろえます。すぐにばらけてしまうので、接着剤で貼り付けた後、剥れないように竹ひごを扁平に削った「腹竹」を作り、上から釘で止めます。杉皮の頂部には干蕨(ほしわらび)を半割にして被せます。「枕茅(まくらかや)」は竹ひごを束ねて作ります。押さえの「棟竹」は細竹の節間が合うところを切って釘止めます。



格子を取り付け



棟部分の装飾

【完 成】

背景となる和庭は未完成であるが、「楼門風覆い」完成です。



可動式前壁を付けて完成



慈光院茨木門



俯瞰完成写真

出来上がり寸法：建物寸法 幅 42cm × 奥行き 23cm × 高さ 42cm
全幅 57cm × 全奥行き 37cm

元のページへ戻るにはブラウザの「戻る」ボタンをご使用ください。